

獣医師と人工授精師が挑 「名寄和牛」のブランド

新規就農の40代夫妻が継承した肉牛牧場「レジーナヒル」

道北の名寄市で獣医師の仕事を続けてきた好本充徳さんと、子育てのかたわら家畜人工授精師の国家資格を取得した妻の佑妃さんは今年4月、晴れて新規就農者の認定を受け、市内で肉用牛の繁殖経営を手がけてきた牧場を継承した。「レジーナヒル(お妃の丘)」と命名した牧場は、傾斜地を中心に約40haの広さがあり、ここで放牧した黒毛和種の牛を肥育し、「名寄和牛」としてブランド化して食べてもらうことが今後の目標だ。8月には一頭目の牛を屠畜場へ送り、戻ってきた肉などは近く市内と隣町の一部店舗での提供が始まる。これまでの経緯と、引き継いだ牧場を起点に「名寄和牛」を食卓に届けるための営みを紹介する。

(ルポライター・滝川 康治)

戦する づくり ナヒル



今年4月に肉用牛の繁殖牧場を継承し、一貫経営と「名寄和牛」のブランドづくりを始めた好本充徳さん、佑妃さん夫妻。牧場名は「レジーナヒル(お妃の丘)」、母牛たちに敬意を表して命名した。獣医師と家畜人工授精師、受精卵移植師の資格も生かし、畜産経営の可能性を追求する

名寄市の郊外に今春誕生した 新規就農の夫妻が営む肉牛牧場

名寄市の中心部から車で5分ほど行った、天塩川の支流・名寄川を望む丘陵地帯に今年4月、40代の夫婦が営む肉用牛の牧場「レジーナヒル」が誕生した。

牧場を切り盛りするのは、獣医師の好本充徳さん(1984年、札幌市生まれ)と、人工授精師の妻・佑妃さん(同年、深川市生まれ)。牧場の名称は、イタリア語のレジーナ(お妃)と、丘(ヒル)にちなむ。ふたりにとってお妃様である母牛たちと、佑妃さんの名前を組み合わせ命名したという。

「レジーナヒル」の広さは40ヘクタール余り(うち放牧地20ヘクタール)。放牧用の農地の多くは傾斜地で、母牛たちは丘を上り下りしながら暮らす。ここは、足腰の強い牛たちが育つ牧場でもある。

「僕は日本で長く飼われてきた生き物である和牛が大好きでした。性格が温厚なので飼いやすく、妻も牛を可愛がってくれるので、うれしく思っています(充徳さん)」

「うちの子どもたちも、懐いてくれ

雪質の良い道北の地を選んだ。13年には佑妃さん(84年、深川市生まれ)と結婚、今では小学生の男の子が2人いる。

医療従事者の両親の下で育った佑妃さんは、介護の仕事をしていたが結婚を機に士別に転居し、子育てと介護のパートに従事。24年に夫がNOSA Iを退職して独立した翌年、4週間の研修を受け、家畜人工授精師の国家資格を取得している。

10数年におよぶNOSA I生活に



獣医師や人工授精師としての活動の拠点にしている「Good More」の事務所

る牛に名前をつけたりして、仕事を手伝ってくれますよ(佑妃さん)

夏場は放牧し、地元産飼料だけで育てた黒毛和牛(黒毛和種)を「名寄和牛」のブランドで販売することが目標だ。現在は50頭ほどを飼養しており、8月下旬には肥育した経産牛を初めて屠畜場に送った。地域の飲食店などの中からは、「名寄和牛」の精肉や内臓を食べてもらう試みも始まっている。

共済獣医師にピリオドを打ち 肉用牛の繁殖牧場を継承する

札幌市内の公務員家庭に生まれた充徳さんは、19歳まで大阪府豊中市で育った。もともと動物が好きで、人の役に立てる仕事ができないかと考え、岩手大学農学部獣医学科(現在は獣医学部)に進んだ。

大学5年の時に農業共済組合(NOSA I)で研修する機会があり、農家に向いて診療や人工授精、難産の介助などに立ち会う中で、獣医師の仕事に魅力を感じたという。

大学を卒業した2010年に北海道に戻り、上川北NOSA I(当時)士別診療所で獣医師生活をスタート。スノーボードが好きなこともあって

ピリオドを打った好本さんは、名寄市内に診療や人工授精のための個人事業所「Good More(グッド・モア)」を立ち上げた。事務所名には「もっと農家の役に立ちたい」「農家とともに良くなる方向に歩みたい」との思いを込めている。

開業の前後から2年間ほど、好本さんは名寄市風連町の法人酪農家に勤務した。和牛の受精卵移植に力を入れていた農場で、次々に子牛が生まれる……「受精卵づくりを含めて和牛の飼育に取り組みたい」と考えていたので、打って付けの職場だったらしく、子牛の哺育管理を任せられていたという。

晴れて新規就農者に認定され 畜産農家のサポートにも奔走

そんな中で、現在地で肉牛の繁殖牧場を営んできた生野博さん(52年、旧名寄町生まれ)が近く離農するという情報が入る。ここには診察などで何度か訪れたこともあった。

「離農後の牛舎を借り、(法人酪農家の)第2牧場にできないか」と考え、打診してみたが、その構想は叶わず、肉牛の繁殖牧場を継承する話に落ち着いた。

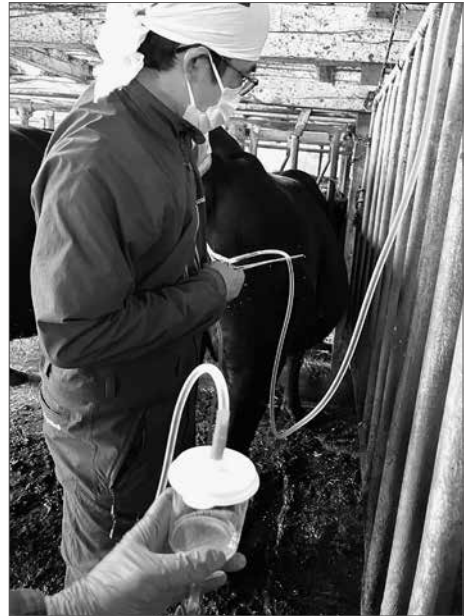
生野牧場は敗戦

後にサハリン（旧樺太）から引き揚げてきた先代らが開拓した歴史があり、10年ほど前まで酪農を営んでいた。筆者には、50数年前に名寄農高の生徒だったころ、この牧場でデント

コーン収穫のアルバイトをした思い出がある。

昨年暮れまでに牧場の継承話がまとまり、好本さんは法人酪農家を円満退職し、今年4月に牧場を引き継ぐ。NOSAI退職後の約2年も実習期間として見なされ、晴れて名寄市から新規就農者の認定を受けた。来春までは、生野さんから機械類の操作などを教わる継承期間という。好本充徳さんの日常生活は、牛飼いと獣医師や授精師などとの「二足のワラジ」で、とても忙しい。

朝は市内にある自宅から牛舎まで車を走らせ、牛舎の掃除と餌やりをして帰宅。子どもたちを学校に送り出し、個人事業主として獣医師の仕事をして昼の餌やり作業。午後も再



受精卵を採取する好本充徳さん（Good More提供）

び獣医師の仕事をした後、ミキサーを使って飼料を調合し、夕方の餌やり……と続く。

獣医師としての仕事は、他の牧場に出向いての牛群の疾病に対するコンサルティングをはじめ、受精卵の採取や移植、繁殖管理などを通して畜産経営をサポート。牛のDNAを調べて乳量や体型、病気のなりやすさなどの遺伝的な能力を子牛の段階で数値化して予測する「ゲノム検査」の結果を基に、個体改良の方向を農家に助言することもある。

「僕のメインの仕事は、受精卵の採取や移植です。その中で、畜産経営の無駄を省いていく作業のお手伝いをしています」

牧場から少し離れた場所に開設し

た事務所は、家畜人工授精所として登録済み。授精師の資格を取得した妻の佑妃さんも最近、家畜受精卵移植師の資格を取得するため2週間の研修を受けた。「これからは、夫の仕事との関係で採卵や検卵、受精卵の凍結や採卵などの作業の手伝いができるかな」と意欲を見せる。

夏は放牧して健康な牛を育て「名寄和牛」のブランドをめざす

好本充徳さんは、少年時代から焼肉が大好物だった。しかし最近、美味しい肉を食べたくても、脂っぽいのが多く、たくさんは食べられない。そこで、これまで獣医師として習得した受精卵移植の技術などを生かしながら、美味しく食べ飽きることのない肉を、消費者の手の届く価格で提供できないか——と考えるようになった。

NOSAIを辞めた24年、道北ビジネスプランコンテストに、「名寄和牛で地域発展」をテーマにしたブラ



産まれた黒毛和種の子牛は10日間ほど、母牛と一緒に生活する（同）

自家生産や買い取った子牛を8〜10カ月間育てて家畜市場に出荷する一方、繁殖の役割などを終えた雌牛を「名寄和牛」として肥育する構想が具体化しつつある。

「まずは和牛の経産牛を肥育し、食べやすくして出荷する。ゆくゆくは30カ月齢くらいまでの牛の出荷をめざします。軌道に乗ったら、受精卵移植によって生まれた子牛を酪農家から買い戻し、うちで肥育すること

「オール地元産」にこだわって「名寄和牛」の第一号が誕生

好本さんがめざす「名寄和牛」の定義は「名寄の飼料を食べ、名寄で2年以上育った牛」。飼料は基本的に



夏場の放牧に向け、牧柵の準備をする好本佑妃さん（同）

どう肉用に仕上げていくのか試してみた。グラスフェッドの牛はサシ（脂肪交雑）が入りにくいけれど、草の香りが留まっていて、美味しいと思いますよ。うちは薬を使った治療をしていないので、『健康な牛から健康

グラスフェッド（牧草だけを与えて育てること）、夏場は広い牧場に放牧する。グラスフェッドの牛肉は赤身が多く、脂肪分が少なめで健康的だ。高タンパクで、オメガ脂肪酸なども豊富に含んでいる。

肉用牛の場合、出荷前には穀物など濃厚飼料を与えて肥育する生産者が大方だが、好本さんは名産の米ぬかを食べさせる試みも始めた。

「この牧場では以前から、夏は放牧、冬場は牧草のみで舎飼いするスタイルを続けてきたベースがあります。そうして育ってきた牛を数カ月間、



傾斜地に広がる「レジーナヒル」の放牧場。採草地を含め40haほどの広さがある

なお肉をめざす」というアピールもしたい」

8月下旬、「名寄和牛」をめざす経産牛1頭を屠畜場に送った。第一号の精肉と内臓は、市内の焼肉店「牛若丸」と下川町の「北つむぎ商店」で取り扱うことになった。

「試食会も開催し、納得できる味になったら肥育方法を決めていきたい。名産の豚肉と合わせてハンバーグにすることもできるでしょう。5年後には親牛を50頭まで増やし、市内のレストランで『名寄和牛』のステーキを食べてもらえるとうれしいですね（充徳さん）

好本さん夫妻の夢のひとつは、学校給食に『名寄和牛』を提供すること。佑妃さんはこう力を込める。「北海道では牛肉の食文化がうまく

ンを提案したところ、最優秀賞を受賞（25年も受賞）した。同コンテストは、旭川市や名寄市など9自治体でつくる協議会が主催し、15年度からスタートした企画。各自治体で創業予定もしくは開業後2年以内の新規事業者などを対象に、ビジネスプランを募集してきた。

好本さんの企画案は、名寄でのブランド和牛の生産・流通をめざすとともに、酪農家の経営安定に向けて乳牛から和牛を生産するため、受精卵移植技術を推進するもの。受精卵の採取から移植、肥育・出荷までを一貫して行なう——という構想だ。

牧場を継承したことで、構想の実現に向けて動きだした。8月末現在の飼育数は、親牛29頭と子牛20頭。

育たず、身近に手を出しやすい環境ではありません。自分たちは、牛を可愛がって育てる。最後はお肉になり、きちんと食べて元気になる——そうした道をめざしています（充徳さん）

「ゆくゆくは、継続して名寄市の学校給食にも提供し、美味しく安全なお肉を食べてもらえるとうれしいですね。そうしたお肉をつくり、皆さんに食べてもらえる授精師や移植師として頑張ります（佑妃さん）」

こうした食育の一環として、昨年から市内の中学2年生を対象にした職業体験も受け入れている。

黒毛和牛の飼育や受精卵移植、獣医師としてのコンサル業務、食肉などのブランド化、食育の試み……とその取りくみは幅広い。一生産農家としては駆け出しなので、農業機械の操作や乾草づくりも習得しなければならぬ。ここ5〜10年の間に安定した経営を実現できるか、たゆまぬ挑戦が続いていく。

■Good More

名寄市緑丘37-52

☎080・5565・8679

Eメール: goodmore@kind.ocn.ne.jp